日本文化学講義（ウェブ公開用資料）

「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代

日比 嘉高

第10回 島崎藤村、写実小説のジレンマ 4

藤村伝説の背後を読む

『破戒』以後、作家藤村の名は確立し、
彼の〈伝説〉もまた生成していく。
短篇「突貫」はそれに寄与し、またノイズを入れる。

1 前回のやり残し――「並木」

▼モデル達の抗議による書き換えのポイント

初出『文芸倶楽部』一九〇七年六月 ↓ 『藤村集』一九〇九年一二月）

- 「省略や暗示による象徴技法」の獲得（高橋昌子『島崎藤村 遠いまなざし』和泉書院）
- 「人称的な語り手像」が薄らぎ、「登場人物の意識に密着した語り」が浮上。「作為の主体を見えなくしている」（以下、金子明雄「「並木」をめぐるモデル問題と〈物語〉の外部」『流通経済大学社会学部論叢』一九九五年三月）
- 「印象的な表現の具体的な意味を埋める作業が読者にゆだねられ」る。
- モチーフが暗示され「読者の側に主題探しの役割が課せられる」。
- 増補がほとんどまったくされていない。（日比）

⇩ モデル問題を経て、藤村は〈自らが追求する主題を、ディテールを描くことなく実現する〉方法を発見した。

⇩ 削除と増補のあり方から、モデルの批判に大幅な譲歩で対応する一方、作品の書き直しによる世界観の変更までは行わない。譲らない一線があった。

▼藤村の姿勢

■引用1■ 島崎藤村「新片町より」（『文章世界』一九〇九年四月、「モデル」と解題し『新片町より』佐久良書房、一九〇九年九月）

「唖峯生氏の譚によると、私は寺の檀徒から、法の敵、三文文士、不徳漢とされた。三文文士の称は私は甘んじて受ける。又、文学上の見解を異にすると云ふ点から下される標語なら、私は法の敵と言はれても、不徳漢と呼ばれても、敢て厭はない。」

「私の著述は何故斯う迷惑がられるだらう。〔…〕私は自ら尋ねて、三つの答を得た。即ち、我技量の拙劣なるが故

である。離れて物を見ることの出来ないからである。ある生活の一部を写す時、全体を写すことを忘れたからである。／

私はモデル問題が、馬場君、丸山君のごとき親しき人々の手より提供されたことを羞ぢた。当時、私は筆を折つて、文壇を退かこうかとも考へた。けれども私は行ける処まで行つて見るより外に、自分取るべき道はないと思つた。で、今では、拙劣なのは仕方がないが是も出来るだけ勉めて見ようとし、正しく物を見る稽古もしようし、又、一部を写す場合にも成るべく全体を忘れないやうにして、余計な細叙は省きたいと心掛けて居る。〔…〕勉めて見て、もし是が出来るやうに成れたら、其時は大きく迷惑を掛けるやうなことが有つても、小さな迷惑だけは掛けずに済む。どうかして、大きな迷惑を掛け得られるといふところまで進んで見たい。」

- より一層の努力と進歩
- 「全体を忘れないやうにして、余計な細叙は省きたい」
- 「芸術」への価値づけによる逃げ道、開き直り

2　〈藤村伝説〉の生成と「突貫」

2・1　〈藤村伝説〉のつくられ方

▼ 藤村の歩み

- 「破戒」の原稿をもって信州から東京へ
- 「破戒」好評を博し、その後作家のしての声望はどんどん上がる
- しかし一方の私生活では、相次いで三人の娘と妻を亡くす

⇦

藤村伝説　「三児の死は藤村にとって、『破戒』完成のための〈犠牲〉、みずからの芸術に捧げたいけにえにほかならなかった。」（三好行雄「解説」『藤村全集』第三巻）

▼ どのようにして〈伝説〉はつくられるか。

(1)周囲の評価・回想　＋　(2)自身の作品・回想

(1) 周囲の評価・回想

【資料1】 水野葉舟『明治文学の潮流』紀元社、一九四四年九月

【資料2】 山崎斌『藤村の歩める道』第二書房、一九四八年六月、初刊一九二四年

【資料3】 伊藤整『日本文壇史9』講談社、一九九六年四月、初出『群像』一九五八年九月

(2) 自身の作品・回想

小説「芽生」（一九〇九）、回想「三つの長篇を書いた当時のこと」（一九二七）、**小説「突貫」**

2・2　「突貫」という作品

▼ 作品について

「突貫」　『太陽』一九一三年一月発表。その後第四短篇集『微風』（新潮社、一九一三年四月）収録。

▼　先行研究

■引用2■　瀬沼茂樹『評伝　島崎藤村』（筑摩書房、一九八一年一〇月、214頁）

「「突貫」も「岩石の間」につづく時期の『家』の一部をとりあげ、日露戦争の不安のなかに、『破戒』を書いて、新しい作家生活に突貫して行く気分を、それにふさわしいスタイルで描いた。」

■引用3■　三好行雄「解説」（『島崎藤村全集』第五巻、筑摩書房、一九八一年五月）

「「突貫」は形式的にも新しい工夫を試みた異色作で、二行の空白をおいた書きだしは〈私は今、ある試みを思ひ立つて居る。……けれども斯のことは未だ誰にも言はずにある。〉という現在形ではじまる。冒頭の書かれざる二行は収束部のそれと呼応して、体験を切りとった過去の時間から完了した過去としての完結性を薄め、いわば消えてゆく記憶のなかからあたかも強いフットライトを浴びてよみがえった時間といったふうな効果を添える。光源は現在にある。『破戒』の制作と刊行のために背水の陣を敷いたかつての危機的な時間を想起しながら、藤村は過去を過去として描くのではなく、あえて過去の内部に身をおいて、それをひとつの現在として生きようとした。そのことによって『破戒』の正否を賭けた志賀への旅は、それを書く藤村の心情とぴったり重ねられる。〈前へ、前へと辿つて行つた……前へ……前へ……〉という突貫の姿勢――後年の回想（「『苗代集』附記」、「定本版藤村文庫第六篇所収）でいえば、〈（埋もれてゆく）境涯を突き破らうとするものゝ消息〉が、あらたな危機にたちむかう作者の現在にまで回帰するのである。自伝性の濃化自体を〈内的危機の切迫したときの証拠〉（亀井勝一郎）と見る説もあるが、いずれにしても、危機を超える新生の方向を文学的出発機の初心にさぐろうとしたモチーフは鮮明である。」

↓　どんな「過去」を選び、描いているのか、が問われていない

3　「突貫」論

3・1　「突貫」を考えるポイント

- ほぼ藤村伝説に沿う物語
- 周囲の戦争（日露戦争）と自分の戦争（文学の創作＝「事業（しごと）」）との並列と照応。
- 「名のつけやうの無い恐怖」

「突貫」整理

ある試み（「破戒」執筆）を思い立っている／**「旧主人」の発売禁止とモデルへの恐怖（「藁草履」も）**／塾から見える戦争の風景／知人の出征の暇乞い／部屋にて千曲河畔の情景を想起ー外は戦争／函館へ行く決心／小諸出発／東京着／青森着／函館着／小諸で塾を辞める噂が伝わる／戦争も落ち着く。体操教師の応集／外の祝勝会と部屋での創作／一年経つ。さらに資金が必要／志賀の友達へ相談／雪中の行軍

- 基本的には「破戒」出版の系列の記憶のみ
- 過去の作品は、数あるうち「藁草履」「旧主人」しか言及されない
- しかもその記憶は、「名のつけやうの無い恐怖」と旧師に背いた記憶

3・2　「名のつけやうの無い恐怖」と〈伝説〉の中の亀裂

分析　作品の論理構成から考える

（1）「旧主人」「藁草履」のエピソードを、〈写す（＝表層）〉／〈精髄（＝深層）〉に振り分けてみる

（2）「旧主人」「藁草履」のエピソードを、書く・話す／読む・聞くに振り分けてみる

「私は無いものを有るやうに見せる手品師では無い。」

「先生は私に向つて何事も言はない。けれども私はそれを読むことが出来る。」

「私の始めたことは旧師にまで背くやうな結果を持ち来した。その意味から言つても、〔…〕去りたいと思ふ。」

↳**「突貫」は、伝説を形成した作品の一つであると同時に、それに亀裂を入れてしまう作品でもある。**

3・3　小説――この「不思議な性質」

◇「斯の真昼間、私達の鼻の先で行はれたことを写して、どうしてそれで斯う自分の気が咎めるだらう。」

◇「実際私の始めたことは斯ういふ不思議な性質のものだ。」

↳　小さな共同体内での噂話と、小説とは何が違うのか？

(1)　**公共性、リアリティ、転形**

■引用4■　ハンナ・アーレント『人間の条件』（筑摩書房、一九九四年一〇月、原著初版一九五八年）

「第一にそれは、公に現われるものはすべて、万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示されるということを意味する。私たちにとっては、現われ（アピアランス）がリアリティを形成する。〔…〕見られ、聞かれるものから生まれるリアリティにくらべると、内奥の生活の最も大きな力、たとえば、魂の情熱、精神の思想、感覚の喜びのようなものでさえ、それらが、いわば公的な現われに適合するように一つの形に転形され、非私人化（デプリヴァタイズ）され、非個人化（ディインディビデュアライズ）されない限りは、不確かで、影のような類の存在にすぎない。このような転形のうちで最も一般的なものは、個人的経験を物語として語る際に起こる。」（p.75）

(2)　**メディアとしての近代小説1　出版と流通**

●著作権意識の高まり、「自費出版」の先駆けとしての藤村

●執筆、出版、流通、享受というプロセスに、当時最も自覚的だった作家

【資料4】　藤村「著作と出版」（『読売新聞』一九二五年五月二五日）

(3)　**メディアとしての近代小説2　滞留、蓄積**

○「最早（もう）あの話を読んだ人も忘れる頃だ。」

にもかかわらず、「身を縮（すく）めずに其番小屋の側を通れなかつた。」

↳　実際そうだったという経験を語っているかもしれないが、「水彩画家」にまつわるモデル問題のタイムラグを経験している藤村が書いていることに注意。

↳　小説は、出版の形態を変え何度も刊行されうる。しかも、モノとして長く存続する。

★次回「新生」　――　・藤村が「突貫」を描き、藻掻きながら前進しようとした困難とは？

・藤村のモデル小説中最大の被害者こま子は、どう描かれたのか？